

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯

宇土市宮庄町に所在する轟貝塚は、縄文時代早期末～前期の轟式土器の標式遺跡であり、古くから研究者の間で注目されてきた。第4節で述べるように、古くは大正の頃から、複数の大学や研究者により調査が行われ、縄文時代から中世にかけての土器・人骨・貝製品・石器・骨角器・陶磁器など多種多様な遺物が出土している。それらの調査で出土した遺物の多くは、それぞれ調査主体となった大学等が持ち帰り保管してきた。その内、昭和41年に慶應義塾大学の江坂輝彌氏を団長に行われた調査の出土遺物は、長らく東京の慶應義塾大学構内で保管されていたが、平成13（2001）年度の宇土市への仮移管と平成19（2007）年度の再整理報告書の刊行を経て、平成23年度（一部は26年度）に正式に宇土市に移管され、遺跡所在地である宇土市での活用が可能となった。

一方、轟貝塚自体は昭和33（1958）年に市史跡に指定され、守るべき遺跡として公的に位置づけられた。しかし、何度も調査が行われてきた反面、遺跡の範囲や時期別の変遷、貝塚に伴うとみられる集落の位置や内容など、遺跡を語る上での基礎的な情報が未解明の課題として残っている。そうした中で近年、遺跡周辺でも新興住宅が拡大するなど、開発により遺跡が破壊される危険が高まっている。

こうした状況を受けて、宇土市では貝塚の範囲や内容把握を早急に行う必要があると判断し、平成15（2003）年度に貝塚中心部の測量調査を、16～17（2004～2005）年度に範囲確認を目的としたトレンチ調査を実施した。本書は、これらの調査に続く遺跡の内容確認を目的とした調査の概要報告である。

第2節 調査の組織

調査主体 宇土市教育委員会

調査責任者 宇土市教育長 木下博信（平成23～25年度）、浦川司（26～27年度）、太田耕幸（27～28年度）

事務局 教育部長 山本桂樹（23～25年度）、前田保幸（26～28年度）
文化課長 坂本純至（23～24年度）、木下洋介（25～27年度）、池田和臣（28年度）、山本保廣（28年度）

文化(財)係 松田安代（係長：23年度）、船田元司（課長補佐兼係長：24年度）、赤澤憲治（係長：25～27年度）、宮邊幸子（参事：23・25～28年度）、稲崎憲一（参事：24年度）、園田志穂里（参事：24年度）、藤本貴仁（参事：23～27、係長：28年度）、九谷景子（25～27年度）、平田睦美（主事：23～24年度）、大浪和弥（技師：28年度）、芥川博士（技師：23～28年度）

※平成23年度の文化財係は、機構改革のため平成24年4月より文化係

調査指導

文化庁文化財部記念物課、熊本県教育庁教育総務局文化課

宇土市重要遺跡保存活用検討委員会 吉村豊雄（熊本大学名誉教授 日本史）
渡邊一徳（熊本大学名誉教授 地質学）
甲元眞之（熊本大学名誉教授 考古学）
山崎純男（元福岡市文化財部長 考古学）
小畑弘己（熊本大学教授 考古学）
山尾敏孝（熊本大学大学院教授 土木史）

協力機関及び調査指導・協力者

株式会社古環境研究所、肥後考古学会、九州縄文時代研究会、欄宜田佳男・水ノ江和同・近江俊秀

(文化庁記念物課), 村崎孝弘・長谷部善一・池田朋生・木庭真由子(熊本県教育庁文化課), 黒住耐二(千葉県立中央博物館), 樋泉岳二(早稲田大学), 中村俊夫(名古屋大学), 濱口俊夫・吉田恒・根本なつめ・佐藤伸二・辻誠也・前川清一・高木恭二(宇土市文化財保護審議会), 島津義昭(元熊本県教育委員会), 杉村彰一(肥後考古学会会員), 富田克敏(九州文化財研究所), 西田巖(佐賀市教育委員会)

発掘調査作業員

飯田孝一, 内田博美, 小畑律子, 末鶴順次, 中川道治, 中村洋, 中村正立, 西村和子, 橋本カズエ, 橋本チエ子, 東原遥希, 平野泰彦, 福田フミエ, 藤浦義麿, 古山節子, 右田純輔, 村山艶子, 森実, 余語政利, 秦翔平・松浦正朋・竹村南洋(熊本大学学生), 竹林香菜(明治大学学生)

整理・報告書作成作業員

内田美和, 中川ゆかり, 廣瀬恵子, 山口陽子

第3節 位置と環境

熊本県西側中央から西方の有明海に向かって突出する宇土半島。その半島を構成する大岳火山系の山塊から東に派生する尾根の先端付近, 標高6 m程度の舌状台地上に轟貝塚(1)は所在する。貝塚の西には標高218mの白山を間近に望み, 対する東側には幅50m程の狭い低地を挟み, 地元で西岡台と呼ばれる標高約40mの独立丘陵が存在する。また北東方向には旧白川や緑川, その支流である浜戸川の堆積によってできた熊本平野が広がっており, 貝塚がこの沖積平野の南西端部に位置することがわかる。貝塚の南側には, 上記の丘陵や尾根に囲まれ限られた範囲に標高4 m程度の低地が存在し, 貝塚と西岡台丘陵との間の低地を介してわずかに熊本平野とつながっている。縄文時代の海進期には, この低地を介して貝塚南側まで海が入り込んだ可能性が高い。

現在, 貝塚の南西方向約200mには, 環境省の日本名水百選に選定された湧水「轟水源」が存在する。この湧水がいつから存在していたか定かではないが, 縄文時代に人がここに生活を営み, 貝塚が形成されたひとつの要因として, 付近に湧水が存在した可能性は高いと考えられる。

以上から縄文時代における轟貝塚の周辺環境を考えると, 波穏やかで豊富な魚介類が生息する有明海とその入り江に面し, 背後には宇土半島の山々と森林, 湧水が存在する等, 山海の豊富な資源に恵まれ, 人の生活に適した環境だったことがうかがえる。

そうした環境を背景に, 轟貝塚周辺には縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が残されている。縄文時代の遺跡としては, 轟貝塚の東方約50mの至近距離にあり, 前期から後期にかけての遺物とドンダリなど堅果類の貯蔵穴が発見された西岡台貝塚(2), 曾畑式土器が出土した馬場遺跡(3), その他, 縄文時代の遺物を含む包蔵地である石ノ瀬遺跡(4)や北園遺跡(5)が挙げられる。また, 直線距離で4 km程度離れているが, 縄文時代前期の曾畑式土器の標式遺跡として知られる曾畑貝塚も, 轟貝塚と並んでこの地域の縄文時代前期を代表する遺跡として重要である。

続く弥生時代の遺跡として, 中期の黒髪式の甕棺が出土した北平遺跡(6), 弥生時代後期の集落跡とみられる下松山遺跡(7), そして前期～後期の拠点集落とみられる城山遺跡(8)などがある。特に城山遺跡は, 続く古墳時代, 付近に豪族居館と考えられる西岡台遺跡(9)が出現することとの関係が注目される。西岡台遺跡からは, 舶載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳(10)や迫の上古墳(11), スリバチ山古墳(12)など同じく前期の築造とみられる前方後円墳を一望でき, 豪族居館とその葬られた古墳とが一体的に把握できる例として全国的にも希少である。これら前期の首長墓系譜は中期以降には断絶し, やや離れた場所に単独で立地する天神山古墳(13)を除いては, 付近に前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では, 前期の円墳とみられる神合古墳(14)や猫ノ城古墳(15)の他, 横穴式石室を主体部に持ち後期から終末期にかけての築造とみられる東畑古墳(16)や仮又古墳(17), 山王平古墳(18), 金嶽山古墳(19)などの円墳, 県内唯一の終末期方墳である椿原古墳(20), 多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群(21)などが存在する。その他, 恵里遺跡(22)や椿原遺跡(23)な

ど、古墳時代の包蔵地も存在する。

古墳時代に比べ古代の遺跡は少ないが、西岡台遺跡や城山遺跡で土師器・須恵器が出土し、西岡台遺跡ではその他に故意に破碎された土馬も出土している。

中世になると西岡台丘陵を利用して宇土氏・名和氏が居城とした宇土城跡（西岡台）（9）が築城された。これまでの発掘調査により、中心となる曲輪とその周囲で多数の掘立柱建物跡や竪堀・横堀跡、門跡などが検出され、特に横堀の一部が未完成である点や廃城の際の儀礼的行為「城破り」とみられる痕跡が見つかった点などが注目される。また、宇土城跡と関連する中世の遺跡として、中世の居館跡とみられる椿原遺跡、宇土城主・名和氏の菩提寺である曹洞宗崇福寺跡（24）などがある。その付近、現在の椿原町字船津周辺には、中世の港湾施設である「宇土津」（25）が存在したとみられている。その他、陳の前遺跡（26）や伊津野遺跡（27）でも中世の土器・陶磁器が出土している。

中世末期には、キリシタン大名として知られる小西行長により宇土城跡（城山）（28）が築城され、付近には家臣屋敷跡とみられる城山塩田遺跡（29）も残るが、関ヶ原の戦いで小西が敗れ処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって城は改修された。それも近世初期には廃城となり、続いて宇土細川藩3万石の陣屋町が整備された。小西・加藤時代の城下町を踏襲しつつ、今も使われ続ける上水道「轟泉水道」（30）の敷設などを経て整備されたこの町並みが、現在の宇土市中心街の姿につながる。

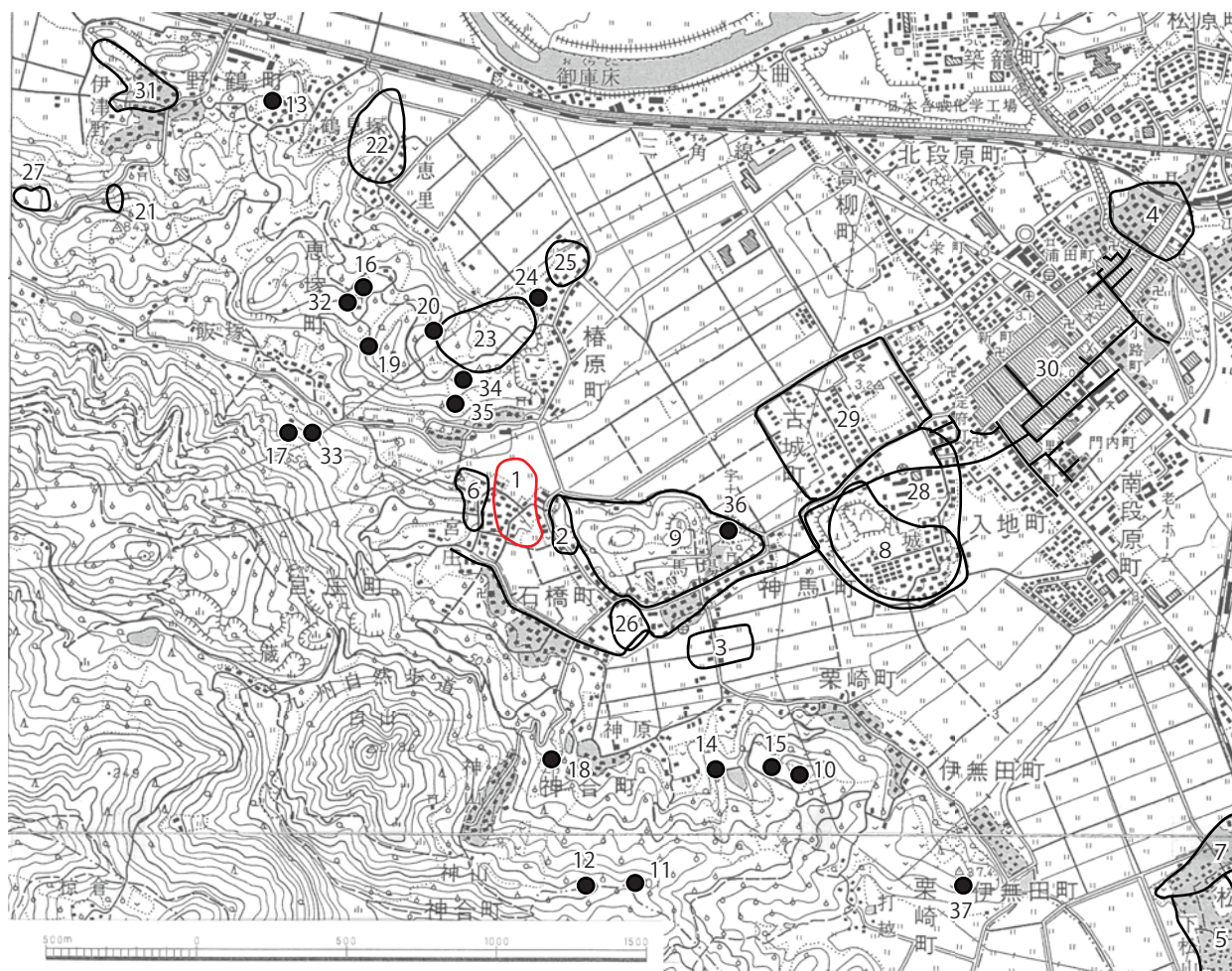


図1 轟貝塚周辺遺跡地図 (1/25,000)

1 轟貝塚 2 西岡台貝塚 3 馬場遺跡 4 石ノ瀬遺跡 5 北園遺跡 6 北平遺跡 7 下松山遺跡 8 城山遺跡 9 西岡台遺跡 10 城ノ越古墳 11 迫の上古墳 12 スリバチ山古墳 13 天神山古墳 14 神合古墳 15 猫ノ城古墳 16 東畑古墳 17 仮又古墳 18 山王平古墳 19 金嶽山古墳 20 椿原古墳 21 神ノ木山古墳群 22 恵里遺跡 23 椿原遺跡 24 崇福寺跡 25 宇土津（推定地） 26 陳の前遺跡 27 伊津野遺跡 28 宇土城跡（城山） 29 城山塩田遺跡 30 轟泉水道 31 野鶴貝塚 32 東畑2号墳 33 仮又2号墳 34 椿原貝塚 35 椿原石蓋土墳墓 36 西岡台箱式石棺 37 久保1・2号墳

第4節 轟貝塚における過去の調査について

轟貝塚ではこれまで、多くの大学・研究者により発掘調査が行われてきた（表1）。遺跡の発見は明治31（1898）年に佐藤伝蔵氏により紹介されたものが初見とみられ、その後大正6～9（1917～1920）年に鈴木文太郎氏、濱田耕作氏、清野謙次氏ら京都帝国大学による調査（第1次・第2次調査 濱田・榊原1920、清野1920）、東北帝国大学の長谷部言人氏による調査（第3次調査）が相次いで行われる。この頃の調査は人骨の検出を主な目的としていたとみられ、報告も人骨の出土状況を中心に書かれている。長谷部氏による調査から10年後の昭和5（1930）年、鳥居龍蔵・松本雅明両氏らによる調査（第4次調査）が実施された。調査の詳細は不明だが、この鳥居龍蔵氏の来訪は同年の肥後考古学会の発足につながるなど、熊本の考古学史にとって重要な意味を持つ（松本1967）。轟貝塚が担う学史の一端として、忘れてはならない点であろう。

層ごとの出土遺物など、現在の発掘調査にも通じる考古学的な記録が残る最初の調査として、昭和33（1958）年に小林久雄氏・松本雅明氏・富樫卯三郎氏をはじめ熊本大学・宇土市・宇土高校などが協力して行った調査がある（第5次調査）。後に松本氏らによって轟A～D式の分類案が提示される基となった調査である（松本・富樫1961）。続く昭和41（1966）年には慶應義塾大学の江坂輝彌氏を団長とする熊日学術調査団による調査が実施された（第6次調査 江坂1971・宇土市教委2008）。調査成果として、多くの出土遺物と共に縄文時代中期～後期にかけて新旧2つの貝塚が存在する状況が確かめられたことが注目される。これら昭和の2調査による成果が、現在まで轟貝塚における堆積状況の理解の根幹を成している。

轟貝塚を直接の対象とした過去の発掘調査は以上だが、その他に宇土市教育委員会が実施した貝塚周辺部における調査がある。ひとつは、轟貝塚の東方約50m、国史跡宇土城跡が存在する西岡台丘陵の麓に存在する西岡台貝塚の発掘調査である。昭和60（1985）年に農業用排水路の工事に伴って調査が行われ、縄文時代前期～中期とみられるドングリの貯蔵穴を検出した（宇土市教委1985）。もうひとつは、平成16～17（2004～2005）年度に実施した範囲確認調査（第7・8次調査）である。貝塚周辺部で計4か所のトレンチ調査を実施した結果、貝層の堆積範囲を北西―南東約120m、北東―南西約60mの範囲と推定し、その周囲に攪乱を受けた二次的な貝層が広がるとした（宇土市教委2005・2006）。

表1 轟貝塚調査史

	調査年次		調査主体者	調査内容・成果
	明治31	1898	佐藤伝蔵	明治31年8月『地学雑誌』に轟貝塚のことを掲載。学史上、轟貝塚について最初に言及したものとみられる。
第1次調査	大正6	1917	京都大学（鈴木文太郎ほか） 熊本医学専門学校	発掘調査。男女各1体の人骨を発見。
第2次調査	大正8	1919	京都大学 （濱田耕作・清野謙次ほか）	貝の散布状況から貝塚の範囲推定を行い、東側に存在する西岡台貝塚についても記録にとどめる。発掘調査では土器・石器・貝製品など多くの遺物や18体に及ぶ人骨が出土。
第3次調査	大正9	1920	東北大学（長谷部言人）	正式な調査報告書なし。濱田氏が記した概要によれば、人骨20体あまりと弥生土器・骨角器・石製耳飾などが出土。
第4次調査	昭和5	1930	鳥居龍蔵・松本雅明	詳細不明
第5次調査	昭和33	1958	宇土市・宇土高校・熊本大学 （小林久雄・松本雅明・富樫卯三郎ほか）	部分的だが、貝層を含むプライマリーな堆積状況を確認。出土した轟式土器の型式学的な検討の結果、A～D式の分類及び確実な層位関係による編年が行われた。
第6次調査	昭和41	1966	慶応大学（江坂輝彌）	新旧2つの貝層が存在すること、古い方の貝層は中期の阿高式期に比定できることが確かめられた。出土遺物は慶応大学が所蔵していたが、平成13（2001）年に図面や日誌と共に宇土市に移管され、平成19（2007）年度、宇土市教育委員会より再整理報告書が刊行された。
第7次調査	平成16	2004	宇土市教育委員会	貝塚の範囲確認を目的とした調査。計4か所のトレンチによる調査で、貝塚の一次堆積層は南北約80～100m、東西約70～80mに限定でき、その周囲に二次堆積層が広がることが推定された。
第8次調査	平成17	2005	宇土市教育委員会	
第9次調査	平成23	2011	宇土市教育委員会	貝塚周辺における集落跡（居住域）の所在確認のための調査。貝塚の北側から北西側・西側にかけて計7か所のトレンチ調査を行ったが、一部のトレンチから若干の遺物が出土した以外は、縄文時代の集落を示唆するような痕跡は発見されなかった。
第10次調査	平成24	2012		
第11次調査	平成25	2013		
第12次調査	平成26	2014	宇土市教育委員会	未だ不明瞭な点が多い貝塚中心部の堆積状況等を確認するため、過去の調査区の再掘削と基本とする発掘調査を実施。その結果、2次調査区の下部で、早～前期の遺物包含層と集石遺構、焼土を伴う土坑など、縄文時代早期～前期の生活痕跡を初めて確認した。また、それに前後する層位から人骨も検出した。
第13次調査	平成27 平成28	2015 2016	宇土市教育委員会	

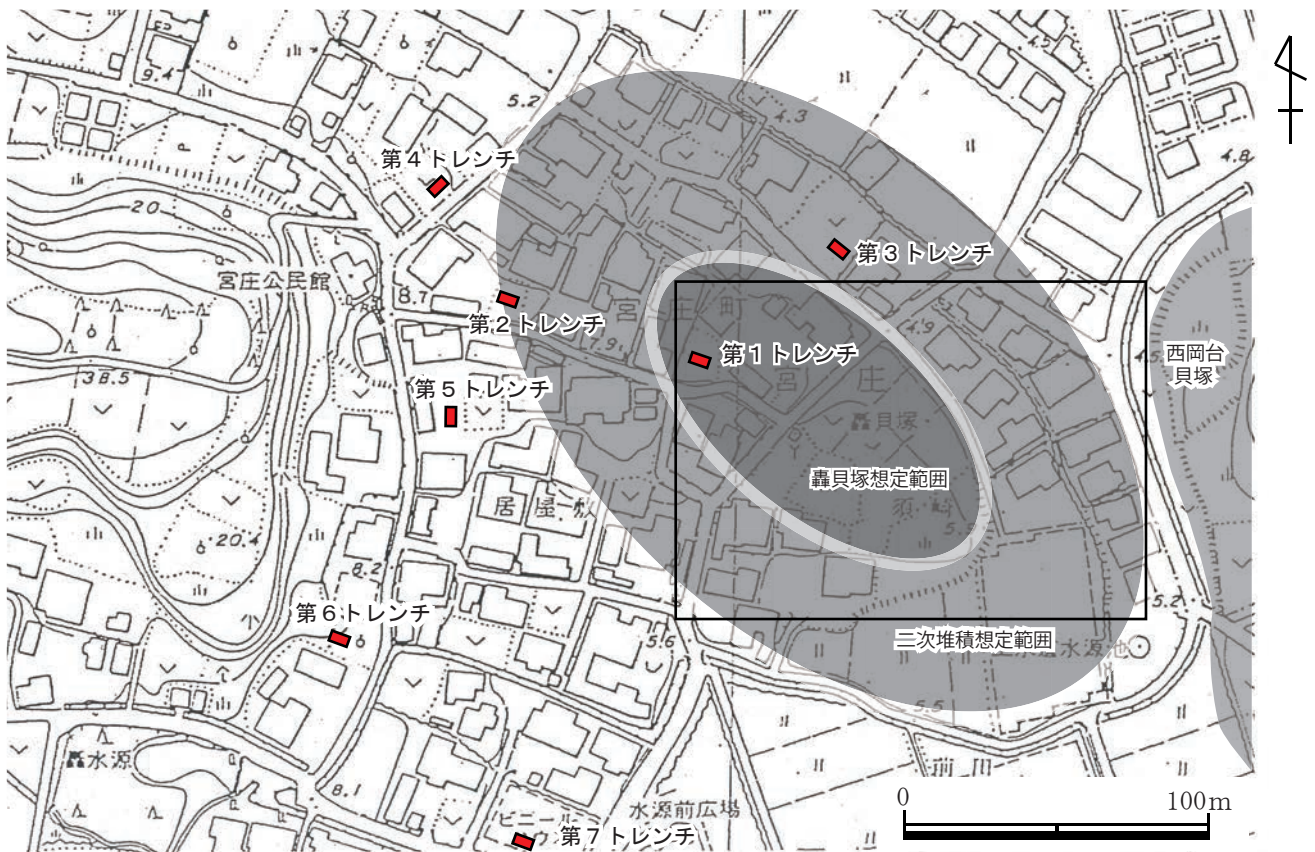


図2 貝塚想定範囲と周辺発掘調査位置図 (1/2,500)



図3 貝塚中心部調査位置図 (1/1,000)

第2章 貝塚周辺部の発掘調査

第1節 調査の目的と方法

平成16～17年度に宇土市教育委員会で実施した範囲確認調査により、二次堆積を含めた貝層の広がりを見推定した（図2）。しかし、貝塚といえども貝層部分だけが遺跡ではなく、その付近には貝塚に貝を廃棄した人々の生活があったと考えるのが自然である。よって、そうした生活痕跡の有無や、居住域や墓域の位置など、集落全体の構造が検討されて初めて遺跡の全体像が把握されたとと言える。

以上の考えに基づき、貝層以外を含めた縄文時代の集落構造を解明するために行ったのが、平成23～25年度の貝塚周辺における発掘調査である。

調査は貝塚中心部から北～北西側の、貝塚よりやや標高が高い微高地部分を主な対象とした。これは、舌状台地の先端に食物残渣の廃棄場所としての貝塚が存在するなら、居住域はその少し手前の台地上にある可能性が高いとみたことによる。ただし、現在そこは民家が密集する宅地となっており、まとまった調査区が設定できない。そのため、やむを得ず個人の敷地内で小規模なトレンチによる発掘調査を行うこととした。トレンチは2m×5mの約10㎡を基本単位とし、合計7地点において調査を実施した。なお、表土剥ぎや埋め戻しも含めて、調査は全て作業員による手作業で実施した。

調査期間は平成23～25年度の3か年にまたがり、2～3地点ずつ調査を行った。なお調査次数は年度で区切るが、全体を一連の「轟貝塚周辺発掘調査」と位置付け、トレンチ番号のみ通し番号とした。平成23年度の第9次調査は、貝塚中心部からみて北西方向の2地点（第1・第2トレンチ）、24年度の第10次調査は貝塚の北側1地点（第3トレンチ）及び、北西側2地点（第4・第5トレンチ）の計3地点、25年度の第11次調査は貝塚の西側、湧水地「轟水源」付近の2地点（第6・第7トレンチ）で調査を行った（図2）。

第2節 調査の成果

計7地点における調査の結果、およそ縄文時代とみられる遺構や遺物包含層が確認されたのは1Tのみである。1Tでは縄文時代後期を主体とする遺物包含層、土坑状に部分的に検出された貝層、複数のピットなどが検出された。ここは昭和41（1966）年の第6次調査で後期の貝層や人骨が出土したEトレンチに近く、当時の調査成果とも矛盾しない。一方で甕式土器や阿高式土器など、前期・中期の痕跡はほとんど検出されなかった。検出されたピット群が住居などに伴うものかは不明である。

その他、間接的ながら縄文時代の痕跡とみられるのが3Tで検出された貝層である。激しい湧水と調査区中央の攪乱により十分な検討ができなかったが、現地表から約1.7mの深さでハイガイを主体とする貝層が確認された。縄文時代のプライマリーな貝層かどうかは不明である。

貝塚中心部から北西方向に位置する2・4・5Tでは、縄文時代の遺物が若干は出土するものの、明確な遺構はおろか遺物包含層すら存在しなかった。後世の削平による可能性もあるが、一方で弥生・古墳時代や中世の遺物は多数出土するため、元々縄文時代の遺構・遺物は少ないと考える。

全7地点のうち、貝塚中心部から最も離れ、現在は環境省選定「日本名水百選」のひとつとして知られる「轟水源」の近くに設定したのが6T・7Tである。轟水源の湧水が縄文時代にまで遡るとする根拠は無いが、少なくとも付近に同様の湧水があったとすれば、その近くに集落が営まれた可能性は高いとみて調査を行った。しかし結果として、6Tは近世・近代、7Tは古墳時代の遺物を主体とし、縄文時代の生活を示す痕跡はみられなかった。

以上により、轟貝塚の北～北西方向の台地上において、貝塚縁辺部に縄文時代後期の痕跡が残る他は、縄文時代の痕跡は乏しいことが明らかになった。しかも貝塚から離れる程にそうした痕跡は減少する様子が見て取れるため、縄文時代後期を除けば、貝塚北西部の台地上は居住域としては推定し難いと言える。